慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(一)『雲居月双紙』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	2007
year	
Jtitle	三田國文 No.45 (2007. 9) ,p.79- 92
JaLC DOI	10.14991/002.20070900-0079
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-20070900-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵 「道書類」の紹介(一)

『雲居月双紙』翻刻・略解題

恋田 知子

どについては判然としない。

と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種と称される書物群がある。仮名法語を中心に、方言を持ちている。

る点で注目すべきものがある。近衛家という貴族文化圏におけがある一方、『幻中草打画』などの物語草子の類も含まれてい『大灯国師法語』のほか、題目のない仮名法語とおぼしき書物とがなかったが、『仏国禅師法語』や『法然上人念仏教化詞』、この「道書類」については、これまでほとんど顧みられるこ

順次、全文を翻刻・紹介していきたい。される書物について、「陽明文庫蔵「道書類」の紹介」として、

あり、その内容、および跋文等から、天台真盛宗の開祖である

今回紹介する『雲居月双紙』は、他に所在を聞かない一書で

参照されたい。書誌については、以下のとおりである。の転写本と判断される。本書についての詳しい考察は、別稿を世の盛全(一四四九-一五〇五)が、文亀四年に制作した草子二-一五〇四)の逝去を悼み、真盛の弟子であり、西教寺第二真盛上人(一四四三-九五)に深く帰依した尊盛法親王(一四七

・函架番号 近トー七二ーニ

形態

写本。上下二冊。仮綴じ。

寸法 上冊…縦二八・二糎。横二○・四糎。下冊…縦二

八・八糎。横二二・八糎。

が異なるか)。中央打付墨書「雲居月双紙上表紙(本文表紙共紙。楮交じり斐紙(上下冊で料紙・筆

(下)」(各冊の本文と同筆)。

めて有意義な書物群であるといえるだろう。「道書類」の意義、

ルとしての仮名法語やお伽草子の重なり方を見る上でも、きわ

および各書については、今後とも稿を重ねて検討していく予定

なかでもとくに伝本が少なく、貴重であると判断

ではあるが、

る、宗教的言談の享受のありようを考える上で、また、ジャン

・本文 半葉八~十行。漢字平仮名交じり。朱書きで、・丁数 上冊…墨付十八丁。下冊…墨付十六丁。

振

-- 79 -

^仮名や訓点等を付す。

- 「雲居月双紙
- 本奥書「文亀四甲子三月十七日盛全書之」

打ち、読解の便宜をはかった。なお、虫損等により判読不能の 翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を 印記 上下冊とも巻首に「陽明蔵」の朱額形印あり。

箇所については「□」としたが、文字が推測できる箇所につい

ては、()内に傍記した。

- (1) 拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」(『仏と女 の室町―物語草子論―』笠間書院 二〇〇七年近刊)。
- 2 て―」(『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇七年近刊)。 『雲居月双紙』奥書を一見すると、「盛全」は「成譽」とも読める 拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐっ
- る人物としては、盛全がもっともふさわしいことなどから「盛全」 と読んだ。 で『往生要集』談義をおこない、尊盛法親王との和歌の贈答をしう が、前掲注(2)において、跋文や周辺資料を検討した結果、上善寺

庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際しま 本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜りました、財団法人陽明文 盛宗宗学研究所所長西村冏紹師に、心より御礼申し上げます。 して、御教示賜りました、陽明文庫文庫長名和修先生、天台真 本稿は、 科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)による

研究成果の一部である。

雲居月双紙上 雲居月双紙

のかれぬみちとしりなからも、けにおとろく心は あはれなるかなや、諸行無常のことわりは、一人も

世とくちにはいへとも、たれとても後世をなけく□(物) すこしもおこりかたく、生者必滅のさためなき

貪する思ひをやめて、きらくに無常を 浄土をねかひて念仏せん人は、ゆかしと五欲に

」(1オ)

こけなるはおほく、しんしちあるはすくなし。され まれにこそ見え侍りけれ。たまくね□□なる人も

觀する心をはけまし、おこたらす佛名を

となへ給ふへし。止観にいふかことく、無常□ ◎ 皇妃にもなさけをおもはす、つみにまかせて 殺鬼は豪賢をもゑらはす、琰魔の獄卒は

妻子珎寶及王位。臨命終時不随者。 呵責すといへり。又大集経云、

まことにおろかなるかなや、庫蔵みつる財寶も、 唯戒及施不放逸。今世後世為伴侶。

(1 ウ

たとひ天下をふさぬる髙官も、地獄のせめを 冥途のくるしみをすくる事あたはす。 たゝ一世の身をやしなふたからなり。 まつたく

つくのうことなし。しかし、道心をおこして佛□□(®) (®) あやうき事、風のまへのとほし火、この身のきえ もとむるにすくる事あるへからす。人のいのちの

80

抑、人王一百五代の帝のちのつちみかとのいん第二の郷、人王一百五代の帝のちのつちみかとのいん第二の のこし侍る也。 ねかはん人はたれとても、かくこそあらまほしき よりて、臨終正念に往生極樂の素懐を 佛教を信して、一行三昧の念仏をとなへ給ふへし。 清淨の道心をおこして、三帰五戒の 罪帳にしるされん事は、殺生十悪のつみに 名利にかゝへられて日夜に経營し、炎天にあけを はらはすして、利欲にふけりて四方に馳走 たえて、はけしき冬の夜の白雪のかうへを 月のまゆすみをなかめ、秋の霜の弓箭をに□ 色に心をとゝめて、春の花のさかへをうらやみ、 目に見、みゝにきく事、いくそはくそや、かなしきかなや、 やすき事、草葉の露よりもあはれなるためし、 皇子にておはしましけるを、山門の座主 事と思ひよるしるしに、つたなき筆のあとを とけまします、御ありさまをきゝて、後世を しかのことく道心をおこし、念仏ありしに よる物也。はやく一たんの名利をいとひ、 まれなる人身をうしなひて、又俱生神の さしも梵天三銖のいとすちよりも しつみなん事、おろかなる心のとかにはあらすや。 せうねつのほのをにむせひ、紅蓮のそこに のこひ、嚴寒にこほりをしのくのみにあらす。つゐに」(2ウ) いくほともなきあたし世に、しはしけすらふ妻子の、 」(3才) (2オ) 願の大悲をまなひ、恵心所作の往生要集 間也。祖釈迦一代の教法をうかゝひ、弥陁本 そき、一切経を披閲し給ふ事、一千日 無上道心をおこし、くろ谷に篭居して けれは、行かたしらす、うせにけり。その時よりも 我名はつふえと云物也。汝にくすりをあたふ 要道をいのる事とし久し。ある夜、十禅師 名聞勝他の災衆をのかれ、このたひ出離の これは、北嶺西塔の住侶に智善院真盛と 碩徳ともあほかれ給ふへしとそ申あひける。 といへり。されは、末の世には、たくひすくなき し給ひて、 壇上道場観のうちに、忽に不動明王來現 世にすくれさせ給ひしかは、天台止観に眼をさらし、 天性聦敏のほまれ、他にことに行学の智鋒 すなはち御諱を尊傳と申たてまつる。 青蓮院とのゝ御付弟にそすゑ申されける。 ことく群集するにあるいは妻子をすてゝかみをそり を講談し給ふに、道俗男女さかりなるいちの 経蔵にいり、なはをくひにかけて、ねふりをの へしといふに、くちをひらき、のむと覚え に参詣するに、社人とおほしき物のいふ様は、 いふ人也。しかるに、宿善のもよをしけるにや。 こゝに時めき給ふ、念仏弘通のひしりあり。 真言瑜伽の深秘をうかゝひ、四度潅頂の 加持護念の證明をかうふり給へり (4ウ) (5オ)

	各号を申うけ、諸国念仏堂にかけたて	の御教化、ありかたくあかめ奉るに、御手跡の	ことを随喜ましますに、いよく〜止悪念佛	此門徒、不断念仏所々の道場、繁昌す□	□僧尼には御對面ありて、十念を御さつけあり。	礼拝ありて、御念仏あるによりて、上人の弟子	木像の本尊を、真盛上人のかたみと恭敬	にそ、あつけさ□□□りける。常にこの 」(6オ)	上人入滅之後は、この御持尊を不遠院二宮様	慈覚大師御作のあみた仏を付属申されけるに、	ける。されは、土御門院様に御信心甚深おはしますにより、	給はん。師資相承のしるしとそおほしめし	十念成就の合掌´、三尊来迎の花臺に乗し	三心發得の心水"、去此不遠の天月を拝し、	をは不遠院とそあらためられける。これすなはち、	あり。御戒名を尊盛とつけ申され、御院号	土の宗門に入せ給ひて、即上人の弟子と御成 」(5ウ)	まして、厭離穢土の道心をおこし、欣求浄	真盛上人とそ申ける。彼化導を信順しまし	れは、世人の諺にも、大道心者いま法然の	する事は、法然上人の出世にもひとしかりけ	りて、諸宗の学侶道心をおこして、念仏	幾千万とかすふるにいとまあらす。これによ	あるいは古郷をさりて出家する僧尼等は、
畢、命乗、臺出,:六塵, 慶哉難、逢今得遇, 永生無為法性身」(8オ)	□濽の文を思ひいたして、廻句申ける。	□肝に銘し、愁涙おさへかたく、心中に往生	と、いまさら媚客の尊顔思ひいたされ□、	かうふり、教誡憐引の芳詞にあつかるへき物を	まさは、いかはかり哀愍覆護の御なさけを	めしくおほへ、さてもつゝかなく御現存におはし	六道生死のちまた、三界輪廻の火宅もうら	離苦のなかきわかれほと、かなしき事あるへからす。」(7ウ)	も、ことに忍かたきは、二たひあひみぬ愛別	をそしほりける。およそ人間八苦の中に	不覚のなみた双眼にあまり、墨衣の袂	香呂に焼香をいたし、念仏をはしむる□、	着してそおはしける。屛風のまへなる机の	御そはには、嵯峨の二尊院の長老香衣を	一間のうちに、はや御棺におさまり給ひける。	般舟院へ参節しけるに、佛殿の南の廊 」(7オ)	しのち、二月三日の日没の時分に、伏見の	おとろきて、かもの常念寺よりもまかり	よし、千本の上善寺よりも注進ありしに	正月廿七日剋にそ御遷化ありける。此	かなしさは、つゐにさんぬる文亀四子	けるか、老少不定の有待の依身の	ころよりも、御不例のよし、ほのかにきこへ	申あひけるに、かりそめに、去年の秋の

所にて、念仏一座廻向いたし、なく/~ 」(9ウ)	ける。同四日の早朝には、先帝様の御廟	必佛尊聖衆の御引接たのもしくそ覚え	奉る御遺言むなしからすは、終焉の□には、	無慚無愧の身なからも、此尊師に値遇し	得生庵をめし、愚僧の餌尋のありける、ま事に	□□ありかたくそ見えける。御病中に	□勝に相好たかふ事なし。聖衆来迎の	□眼ありけりとて、御開眼のゝち、面貌 」(9オ)	□□く御末後には、六七返御念仏ありて	□□て、彼慈覚大師の阿弥陁仏にむかひ	住持盛信をめして、臨終すゝむへきよし、おほ□	南無阿弥陁仏/くと御申ありしか、上善寺の	けるに、病苦しきりにせむるときは、いよ~~	子におさせられ、念仏のひまに御となへあり	御自筆に諸経の要文をあそはし、御障	におほせつけ、稱名念仏の浄業を修しめ、 」(8ウ)	勤をやめさせられ、御病床には両三人の僧衆	御臨終の御覚悟とおほしくして、一切男女の参	宮様、正月廿五日よりも病悩おもらせ給ひけれは、	申されける統温と云老僧の〇 申さる、様は、	となみたとともに夜をあかしけるに、久しく奉口	□□よりもなみたにくれし無人は伏見の里に入合のかね	□□□りふし、いりあひのきこえけれは、	□の上花の臺にすむ月のかくるゝ山の物そ恋しき
?) 終時苦相如雲集 地獄猛火罪人前	如得重病箭入體 衆苦通集安可眠	汝等勿抱臭尸臥 種々不淨假名人	弥陁たのむ心は物にうつ蟬のもぬけの柄の身こそやすけれ	阿みた仏はまよひさとりの中たえてたゝ其まゝに是仏也	弥陁たのむ心のおけの底ぬけていか程いひしつみものこらす	あみた仏と唱る聲や時為よふかとすれは我名なりけり」(11オ	仏に□心もならす身ならすたゝ其まゝに奥つしら浪	₹) □先徳道哥	□心可√待√死⁻。	纔"有"病患,者、莫^論"軽重"。但念"無常"	善導大師云、	欣"淨刹"。	病´是`真善知識也。我依"辛苦,弥厭"浮生,、深	永觀律師云、	けるに、感嘆にたえすしるし侍る也。 」(10ウ)	′) はしける要文を、得生庵よりもくたされ	□られける。其時、御病中にて遊	□に、あたらしく墳墓をつかせ、御石塔をそ 」(10オ	いか□西蓮寺、真盛上人の御廟所の山の	おこなひて、御追善にそ廻向申ける。	二七日の御忌日にあたりしかは、圓頓戒を	かくの如く御中陰をむすひ、同十一日には	門前に一宿して、かもの常念寺に於て	伏見の里をいてゝ、宇治の平等院の

八幡御示現云、 但使廻心多念佛 不簡多聞持淨戒 不淨貧窮将富貴 彼佛因中立弘誓 誰當愛樂是故諸 猶如芭蕉為怨為賊 如空中雲須臾散滅 王位高顕勢力自在 有為諸法如幻如化 化佛菩薩尋聲到 西方弥陁号依"佛本願,出"生死,以"直心,故"生"極樂 いそけ人御法の舩のかにふときのりおくれなは まちわひてなけくとつけよ皆人にいつをいつとていそか いそかはし迎ん程をまてしはし其日の時と定をく也 極樂へゆかんと思ふ心にて南無阿みた仏と云そ □行しるしは又もあらはこそ南無阿みた仏と申ほかには よしあしと思ふ心にあらそいてねてもさめても念仏忘るな 出息は入息をまたす、入息は出息をまたす、 賴咤和羅伎聲唱 文殊云、於"未来世悪衆生,称"念ヘンヘ たすけ給へ、あみたほとけ、南無阿弥陁仏 念佛〉安心、稱名、聲也。 聞名念我惣來迎 佛常呵此身 不簡破戒罪根深 急勧専称彼佛名 能会瓦礫變成金 不簡下智与高才 三界獄縛無 是身虚偽 念傾心入寶蓮 不可親近如毒虵箕 无常既至誰得存乎 一可樂 他力本願 さる覧」(12ウ) (11 ウ) 12 オ 思ふ事かなはぬ世とはしりなから身のうき時は人そうらむる るりの地にうつりかゝやく幡の上に光のあり明の月 ぬるかうちにも忘やられす面影はなみたにいつる人の言葉へりんしゆうの心みたれす弥陁のなをとなふる人そ佛とは成 はかなしや見しもきゝしも過る世になをおとろかぬ我心かな ろもかひも身はうき舟の世間をいとふ心やいたる彼岸 色も香もたゝかりそめの露の身をなかむる人そ花のちり行 御面影の忘やられす、其後のとほし火 むへなるかなや。 ちきりけん心はおなし蓮葉の上に消なん露の身なれは ほともなくたち行月日かすふれはかへらぬ年のなみそかすなる にしへ行心ちこはん日にそへて命つゝむる入合のかね」(13ウ) □んかくはかり の四十八字を句のかみにをきて、うたとや いへり。此要文、道哥なと拝見して、 臨終正念に往生の本きを達し給ふ事、 いのりおはしますによりて、 たれとてもあたしうき身とおもへともこの世をいとふ心すゝます よをいとふ色はあまたにみゆれとも真の道をしる人そなき かのほとけ十聲の御名のかすとても迎とらむとちかふ としも日もかたふくかけの老か身の後世しらて過るかなしさ へんちにもむまれんことの嬉しさよ疑ありと念仏申さん]□呂にむかひ、四十八願になそらへ、色葉 勤修ありし御心さし、真実にいつわりなく、 觀経に、具三心者必生彼國と 佛の来迎にあつかり、 たのもし」(14オ)

蓮花とてよそにはあらす皆人のむねのうちなる心なりけ 'n

そへてやる心の法やうけぬらんなき人とても同し命に

なき人の形見のならましかくはかり涙もよをす水茎の跡 ねてもなを佛の御なをとなふへしなかきねふりのさめんかきりは つゐにみなのかれぬ道といふ人もいまはの時はおとろきにけり

らかんさへ佛のわかれ忍ふ世に三そち三とせの人そ

はかなき」

(14 ウ)

うきことも嬉しき事も夢の世は心にかけて物はおもはし むら雲にかくるゝ月の面影は猶あかなくもしたふ夜半哉

後世をねかふかすにはいりぬれと法に心のなとかたまさる おく山に身を墨染の人はあれと心のきよき法そまれなる いのち程おしきたからはなき物をあたにすてぬる人のおろかさ

けふよりはねかはん物よ法の道人のあはれをみるにつけても」 まきるへき道にてなけれ弥陁の名をとなふる人は至る彼國 やすからぬ此世のわさを思ふ程後世ねかふ心もたすや くりかへし思へはやすき世の中をすつる心のなとかなからん

あさゆふにとふらふ法の聲きゝて心まさしくさとり□□ てにと□も嬉しかりけり御佛の御名をとなふるすゝの給のを ゑにしあれはかゝるすまゐや柴の戸の古里人にねれてそすむ こそよりもすき行人のかすそひてわれも涙といつか消なん ふくたひにあわれもよほす秋風の身にしむほとの露の命に

> 日にそへてちかく成行後世をなけかぬ人のはてそかなしき しはしたゝ思ひなくさめ色かゑてうきはのかれぬ世とはしらすや 見るときはおとろく心ある人もやかて忘るゝ六道かな」(15ウ) ゑにかくも佛のすかた見る時はつみの消ぬるたからなりけり

目にも見よかゝみにうつる面影の有かなきかの心なりける

すき□けてちきりし人の先立てのこる我身もあさかほ せきかねてなみたにしほる心よりなき面かけを袖そとゝむる もしほ草浪のよるへに月いてゝ雲のかけかと小舟さす暮

経陀羅尼念佛の聲をしるへにて行生けん弥陀の国かな かくて、四十八字の色葉よりよろつ文字のしるへと

なる様に四十八願に一切念仏の法門おさまるなり。 我名号をとなへん人を、我國に生れしめんとちかひ 阿弥陁ほとけ四十八願と云は、南無阿弥陁仏と

四十八字につゝめて釈し給へり。其文かいわく、 給へし。この故に、善導大師に四十八願の心を

(15 オ)

若、我は成佛ない十方、衆生者が我は成佛ない十方、衆生

彼佛今現重原不

よろこひをなして、念仏すへしとて也。 此文をとなへて、阿弥陁ほとけにうちむかひ、 法然上人、念仏行者すゝをてにとらん時は 當、知本誓、重願不、虚衆生称念必得往生

わたくしにいわく、

ともすれはうたかはしけれとも

称我名号下至十聲若不生者不取正覚

□のやくそくを思ふ朝には、

いよく本願のたのもしきに、

ゆめの世といひはあへとも人ことに色にふけりてまよふかなしさ

きみゆへにうき世をいとふ墨染の袖一しほの色そまされる さりとてはたすけ給へと思ひより佛のしひのふかくこそなれ

> 称?"-我名号.下至 (16 ウ)

> > 85

 $\widehat{16}$ オ

真盛上人の化導を信する輩、正念に 仍真盛上人御入滅は、去 明應第四天小社生をとくる事、現 證 掌をさすか如し。 往生をとくる事、現證。掌を 當知本誓重願不虚衆生称念必得往生 し給はん事うたかひなくそ覚えける。 十地の位にもとなり、つゐに無上佛果を證 臨終正念に往生し給ひしかは、いまははや三賢 此宮様道心をおこし、御念仏ありしゆへに 道心をおこして、後世をたすかる道にきはまるへし。 あるへからす。其かしこき道あまたありとも 雲居月双紙下 給へと廻向申侍る也。 乗し給りて、弥陁三尊の尊客を拝し うき雲の定なき世のやみを照して、来迎の花臺に さそわれ、おしむへきかなや、卅三とせの秋月 人はたゝ、かしこき心ほと、今世後世の寳は かなしきかなや、十善万乗の春の花、 二月晦日勊、伊賀國あやのこほりなかたの 雲居月双紙下 うれしさにくちにすゝむは念仏也。 佛の来迎を忍ふ夕には、いとゝ臨終の 南無阿弥陁仏と申へき也。 この故に、心を本願にかけてくちにおこたらす、 となへらるゝは名号也。かほとあたなる命なれとも」(17オ) 當時 もはや二月の嵐に (1オ (17 ウ) (18 オ (表紙 護念のしるしにはあらすや そひき、三尊は廟松に来現し給ふと云り。 西蓮寺にて、往生要集の談義の折節、 佛道を行する人は、窮子の父の長者にあひ 誰とても後世をねかはん人は、 不断念佛堂の立まさる事は、 りも滅後にいよく〜繁昌せり。國々所々に たもち、教化をきゐて念佛する事、在世よ 佛教の正程を信して、此上人に随て戒行を の出家の輩も、 誠に濁世末代の愚悪の人も我慢偏執 さかりなる市のことし。紫雲堂上に ける物か、然則、遠近より往来の諸人は 僧尼等は、 おほえ、身命を捨て一蓮託生を期する ありさま雙林の涅槃にも類すへきにと 群集して、愁涙袂をしほり、念佛する よりはしめて、道俗男女雲霞のことく 往生し給ぬと景。されは、其死骸 十念をさつけ、九条のけさをかけ、 おほしめしけるにや、数輩の僧尼に ふし給ひしか、今生對面いまをかきりとや いさゝか虫氣再發のよしをつけ、病床に 七日間倚仔に居たてまつり、門弟の僧尼 無量劫にもうけかたき人身をうけた 善導の入滅にひとしかり 眼前の奇特におとろき、 あに諸佛 かくこそあらまほしき 臨終正念に 」 (1 ウ) (2オ)

する愚夫にことならす。たとひ轉輪王の 輩は寶山に入りて、てをむなしくして餓死 たま~~佛教にあふといへとも、懈怠不信の 一日に富貴の身となるかことし。

田夫野人たりといふとも、念佛に誠心あらは、 梨の苦患のかるへからす。さしもいやしき 位をゑたりといふとも、三寳に帰依せすは、 泥

道心なり。いつも唱へたきは念佛なり。されは、 極楽に往生せん事うたかひなし。たゝほしき物は

」(3才)

先道心といふは、心得あり。自利利他二なり。

道と云は三業清浄の名也。三葉清浄にて

四弘の誓願ををこして説法をのへ、衆生を教化 自利なり。大慈悲を具足して、利養にそます 戒定恵の三学を修行して、佛道を願求するは

念佛せん人は道心者なるへし。くわしく分別すれは、 衆生と云也。惣していはく、戒行清浄にして不断 するは利他なり。此二をつらねて、上求菩提下化

心、捨無量心、この四無量心をくそくしたる人を道心 四無量心なり。いわゆる慈旡量心、悲旡量心、喜旡

一慈無量心と云は、一切衆生を平等にあはれ む願心

者とはいふへきなり。

(3 ウ)

二悲無量心と云は、 の心のことくなるをいふなり。 をおこして、我子に衣食をあたふるかことくなるをいふ也。 をおこして、くるしみをすくふ事、 一切衆生にたのしみをさつくる願心 病子をおもふ親

> をおこして、平等に恭敬供養する事、おやをうやまい 三喜無量心と云は、一切衆生によろこひをさつくる願心

四捨無量心と云は、一切の境界に着心をすへる事を 尊師に孝順することくなるをいふなり。

忌かことし。此四のなかにはことに捨と云、文字か肝要 いふなり。されは五悪を制断する事、病者の毒薬を

煩悩の中にもまつ貪と云は、此かりなる禄、身をやし」(4オ) なり。一切ノ諸煩悩は着心より生すといへり。 貪瞋二の

思ふ心を財貪と云也。又妻子の愛心を初として、 ある人を執着し戀慕する心を色貪と云也。つきに

なはんか為に、衣食米銭とうの財資をほしくおしく

もはらのたつ心を云なり。この忿怒心は根本○心着心 瞋煩悩と云は、一切我心にそむく物をにくみそねむ心に

二なり。まゑにしたかひし物の恩にそむき、義に むつひぬる心の着に二の妄念あり。いわゆる恩愛の よりおこれるなり。まつおやこよりも初として、したしく

下石上に閑居をし、○只身をかはし、稲席に徳をうつむ悩と云也。この貪瞋妄○の心をすてすは、たとひ樹 と云人も出離をとくへからす。名利をはなれゐる物は」(4ウ)

たかふよりも愛心かへりて、憎心となる也。是を瞋煩

に黒衣に身をはなして、納衣をまとひ、頭陁を行 きて、念佛せん人は往生の大事をとくへし。なましひ 市の中にましはりても佛意にかなふへし。 一文不知の尼入道のともからも真実に後世をなけ たとひ

といふとも、我執我悟の心ふかふして財色"貪求

--- 87 ---

する妄念のみに日を追り、人を参會しても人の上

します、ひるはひねむすに人めをかさる名利を思ひ、 よしそあしそと物かたりする事をつみとたにもかな

さは、たゝ在家の男女よりはつみふかし。たま~~佛前 夜るはよもすから愛執を執心してねさめのきたな

語には心よけかて我かとかをくゆる事はすくなくして」(5オ) すゝみても大いねふりに夜をあかし、念仏には物うく物

我身のあさましきことをかんかへす、ましてはらのたつ 行なるか故に、臨終にはかならす錯乱してはちを ときも煩悩のをこる時も、さりとては佛たすけ 物をもとむるかことく、いつはりなく往生極楽をねかふ心也。 さらす也。誠に至誠心の行者と申は、うへたる物か食 人のとかをもとむる心のみある僧尼は、みなこれさいけの

たすけ給へとねるにもをくるにも、臨終正念を祈 とりつかはやとおもふほとの心にて南無阿弥陁仏ほとけ 給へと思ふこゝろり水におほるゝ物か岸の上なる人に

しかるに、当時の念佛者を見聞すれは、虚假名聞の て、念佛する人をこそ真実の行者とは申へけれ。

本願ほこり也。中く在家の人は真実に後世をな

(5 ウ)

なる戒智をかゝやかして、虚受信施のつみふかし。 けきて、慚愧の至誠心あるもあり、出家り人はわつ か

佛前の勤行もたゝ名聞勝他の人めをかさる

なをあまりあり。往生せさる"のみあらす。他の信 は大苦悩をうけて往生をとける事かなしみても 心のみなり。かくのことくこけ心おほきか故に最後ニ

> あり。 心をもさまたけて本願のあたとなる僧尼等も たとひかくのこときの人も至誠心につみをさんけし

て真実浄土をねかはゝ往生をうへき也。其故 一念發心すれは邪正掌をせすかことし。この

ゆへに、かいふんに改悔しておこたらす念佛せは

生をゑん事うたかひなし。そのゆへはおやの心のあはれ

ことし。佛は衆生をかなしみ給ふかゆへに一念捨邪帰 みふかきか故に、子たにもしたかへはやかてよろこふ

正せは佛意にかなふへし。已造業*接取し給ふ也。

法事讃曰、弥陀、因地"世鐃王、佛所"***捨テ、*位"出、家"。 即起於悲智之心廣弘四十八願,以佛願力五逆之與

これよりものち、つみつくらしと發心して念仏すれは、 十悪罪'滅゙得生謗法閘提廻心゙ジ、皆往シ゚ 末造業抑止する也。

たとひ十悪五逆謗法閘提の人も往生する也 他力本願と云は、たすける人あみた仏と云事也。

ふかきか故にたすけ給へ、南無あみた仏と申せはくすりを

阿弥陁佛の慈悲は病子をかなしむおやの心よりも

のみてやまふのなをるをよろこふ父母のことし。 ほとけ

願なるか故にたすけ給へ、阿弥陁仏と申せは すてに我名号をとなへはたすけ給ふへしといふ本

ほとけうけよろこひてたすけ給ふなり。

念仏申て往生極樂すれはほとけの願と行者の願と くすりをのみて本服すれはおやも悦、 子も悦かことし。

もろともに成就することわりを

願行具足機法一躰の名号なりとなつくるなり。 つねに念仏の行者は若我成佛の文を思ひいたして

念仏申にうたかひのおこらん時は阿弥陁経の若タヒク 衆生稱念必得往生の願力をたのむへし。もし又

かかふけんときは必臨○時必不顚倒即得往生の-----の文を訓讀すへきなり。ことにうちふし枕を

文を思ひいたすへきなり。 」(7オ)

因緣 阿弥陀佛与:'諸聖衆;現;'在其前''是人終時心不言'與倒' 若有』善男子善女人,聞ゝ説阿弥陀佛執持『名号』若一日若七日 一心不乱 専持...名号.以...称、名故諸罪消滅、即是多善根福徳

即得吟往生阿弥陀佛極樂國土 六方如来舒适證**。專称,名号,至#西方是

唯恨 衆生疑不以疑淨土對面 不相 行莫い論スキュー弥陀接不接し 誓行:佛語?生ミ安樂:不、得悠々信スヘコトタ 意在『専心回不』回

(7 ウ)

當」知佛本誓一毫無」謬 設 日月輪落ジー゙大地

念佛 必得"往生"也。

弥勒所問経、不断念佛者即得..往生

二者於,,諸衆生,常起,,悲心,除,,残意害意? 者於,,諸衆生,常生,,慈心,不、毀,,其行,若毀?、其行,終不,,往生 當云何念佛凡有"十念,何等為、十

三者發,護法心,不,惜,身命,於一切法不生誹謗

四者於忍辱中生決定心 五者深心清浄不、染二利養

> 七者於,,諸衆生,起,,尊重心,)除,,我心,謙下 言 六者發"一切智心"日々常念"無」有"廢亡」

八者於,,世談話,不,生,味着

九者近,於覚意,深起,種々善根因縁

十者正念觀\佛除:去諸想

心をたしなみ、往生極楽の一大事をねかひいれてさ この十念ひろしといへとも、慈悲に住して人よき

ひるおこたらす念佛すへしと云事也。およそ釈迦 のみ世間の物語をせすしてねふりをのそき、夜る

二なり。止悪は禁忌のことし。行善は眼薬のことし。 一代の説法深廣なりといへとも止善と行善との

のかれ、六字の名号をとなへて九品蓮臺に生す 故に三業の悪障をやめて除て三悪道の苦を へし。念佛の行者は往生をとけさる物二人あるへし。

このむ物はくすりをのみてのちかさねてとくをのむか」(8ウ) ふかことし。これ邪見なり。又念佛申といひてつみを つみつくる人の念仏をうたかふは病者のくすりをきら

ことし。是邪見也。

すといふとも往生すへからす。これ邪見なるか故に 此二の邪見の人は往生しかたし。向阿のいわく、 におゐてとかなしといふ思ひに住せん人はたとひ念仏

滅罪すへし。もし又つみつくるともくるしからすとは ありて念仏するか故に、氷にふる雪のきゆるかことく つみをつくらしと思ひなからもつくるつみはさんけの心 といへり。されはつみをやめさるときもくいかなしみて

念佛の人は臨終正念に往生をうる也。憍慢怠♡の者は 對境の妄念はゆるさるへし。心のそこよりもふかくたゝ 放逸の心あれは氷の上にはすこしの雪もたまるかことく 最後には顚倒錯乱する也。 む所の造意對の貪瞋は往生のさはり也。故に止悪 つみ日々夜々にかさなるへし。かいふんにつかしまんに歴縁 他人の言語にはよらすして (9オ)

する無三功徳の名号也と雖もうたかふ人は往生しかた 南無阿弥陁佛ととなふれは、八百万劫の罪障を消滅

たとへは千夜いつる月も雲おほふときはせん

自よく思量すへきなり。

く、千日申念仏も疑のあるほとは本願にもれるへし。 なし。一夜いつる月も雲はれぬれは、水にやとるかこと 聲申念佛もうたかひなけれは往生すへしと経

念ありなから申念仏にて、摂取不捨の利益にあつかる 釈分明なり。よりて他力本願と云も別の子細なし。妄

のことく散乱の凡夫も念仏申せは、往生極楽の大利 へしと云事也。又病者のくすりをのみて本服する

をうる也。但くすりをのみてのちかさねて毒をのむ人は

るは邪見なり。極重の悪人も念仏する故に あやまり也。念佛申といひて心にまかせてつみをつく

臨終十念の功徳をもて浄土には得生すれともつみ かすと觀経にとけり。善知識のすゝめにより 下品下生にはうまれすとも、十二大劫蓮華ひら

> 聞法のさとりをひらくへき也。 臨終にはかならす上品上生の来迎を得て 即見佛 りある也。是故にかいふんに悪をやめて真実に往生 のあまり有か故に、極楽の中まてもなを花合のさわ の一大事をねかひ、晝夜におこたらす念仏せん人は (10 ウ)

大菩提○護,三業。 深心至誠常念佛 往生要集大意者攝,,此文

(9 ウ)

随\願決定生:極樂: 況復具?*餘諸妙行? 護三業者 有四戒行所謂聲

手 不」作,殺盗っ 不、作、淫欲。 常持言念珠等 常着三衣鉢,

不断念佛堂の僧尼等行儀事 觀;無常我? 不、説、讃毀っ 常願』生事コトタ 常唱『佛名号』

のます。晝夜に帯とかす。衣をはなさす。請用は

堅固"五戒をたもちて非時食をたち、一滴もさけ

一菜一菓等也。初夜より○夜半より震朝○々々○頭陀を行。***** し、一時各番の念佛なり。

伏所にては一切物かたりせす。ことに人のうはさをい 夜佛前へ番の時はねふりをのそきて念仏申へし。又 夜るのねさめに色欲をおもはすして、ほとけの相好を ·わす。

(10 オ)

をいろはさるか故にあかつきをきにも手水つかはぬ也。」 菜一菓なりとも人の施をうけん時は、毎衆に (11 ウ)

くわん念してにすゝをはなさす。かるかゆへに不浄のはたへ

(11 オ (11)

たんなく佛前へまいるへし。たとひ当番にあらすそのまゝ心にまかせて念佛ふさたする事なかれ。ゆ一庫裡にて火にあたり、伏所にて用を弁する時も十念あるへし。

をえなきやうに知音の人とよくく談合すへし。 」(12オ)る事なかれ。又わたくしにも大事と思ひよらん事をは、一小事のことに身をくるしみて大事の念佛をおこたとも細々御堂へすゝむへき也。

にも動轉すれは、魔障定心をもて正法となつく。よろつのわさに俄にはいまふ事なかれ。善事

一檀方へも行人と参會の時、世間の事をとふとても浴、荼毘のとふらひ、別請の時の伴と也。一いつもいそくへき事は佛前のとうち死骸の沐

後世をねかふといへはとてけしからぬ様かたりなしてなそと返事をして、さのみ世事をかたらされ。それも又

にともして後世菩提心をおこすやうにいかなすへし。後世をねかふといへはとてけしからぬ様かたりなしてな

物語あらんに、いかに心やすしといふとも當座にへてまかりたつへし。

両えかたるへし。座敷久しくす、餘事になそら

」 (12 ウ) さうたん久しけれは念仏うすくなる也。往生の一大事

とも人の恨をうくる事也。無人の毀誉する事なかれ。我わさほとゝおもはね

ふ心をもつへきなり。又としわかき比丘尼女房たる徳なしといふともかろしむる事なかれ。うやま僧尼たしなみたき事。としの老たる人をはさし

ー・ハンボイト。 又食物の物かたり燻火の雑音見るしきなり。又食物の物かたり燻火の雑音見阿弥小児にたいし、さのみなれくしき風情みく

くるしきなり。心得給ふへき也。

なかれ。老たる人も徳ある人も衆にましわりては心やすき中なりといふともさのみ用をいふ事

(13オ)

月~っタジス勿な)。戈、レネントム)に見ゆられよ、又事なかれ。又心ある人はさやうにたしなむ人には

我身をかるくとまめにたちて、人をめしつかふ

そたてぬる弟子うへきにしたかはす。いはんやよ用をもきく物なり。我こそふりに見ゆるれは、取

也。一人行へからす。此律儀也。僧尼のひとりあり頭陁と請用と遠行と他宿をは伴を具へきの人はきらふ物なり。

すへき事也。きせんは破戒の基也。故にかりにも二人同道

寺邊在家したしきたんなの所にて細々

参詣参篭は無益也。至誠心の行者をは一不断念佛堂の僧尼、よその霊佛霊社人休息し用事をさのみいふへからす。

いらはうけ悦給ふへからす。たゝ雑行の人なるへし。徳の弥陁の名号をかろしめて、他仏神人夫既 六尊の如来守護し給ふととける。無三功

いたし、成敗すへし。又僧尼の訴訟をきゐてや僧尼の破戒におゐては、衆儀をへて談合を

不足言のたかき事ある也。かて是非をはんする事なかれ。

しかるへき仁にも

(14 オ) (13 ウ 御詠哥にあつかりけるに、とりあへす、 往生要集一座御所望により講談申ける。 不遠院殿様へまいりけるに、御對面ありけるに、 下賜ケテルヒよりて、同九月廿日に上洛サ被 後土御門院様御服で縫し御袈裟を いかの國分寺にて別時念仏ありし時、 去文亀元九月十六日のはんけいに、此双紙*雲居の月と名付る事は 雲居月双紙 下 同生浄土と唱へて十念あるへき也。 出離生死往生 極楽無上佛果 此双紙を御覧せん人は、必不遠院殿尊儀 両三度出御ならせ給ひ、 上善寺にて三七日要集講談し申に、 道心者は用事おほきかさはりなり。 あやまりありと人にあつかはれん同朋をは其人 同し心にくむとおもへは たのもしや一なかれの法の水 おもひつゝしむへき也。 かさならは火滅せんとてひかりますと云事と たらぬ事は後のくすりなり。あまりによき事 過分をはあやしむへきなり。よろつの事に 他人他所にてそしる事なかれ。 機嫌のよき時に余人のきかぬ所にて教訓す へし。もし承引なきとてさからふ事なかれ。 よき事も 」 (14 ウ) ー (15 オ) (15 ウ) 必十念にあつかるへき也。 申ならはしたる事なれは、愁涙をおさへ、 愚筆をそめ侍る也。 無人の面影をうつすかたみは、水茎の跡と いつわりなき人のなさけは、 無阿弥陁佛十念。 おなし御法の水にみんとは おもひきや雲居の上の月かけを 御一見の人は、 涙の色にあらはれ、 (16 ウ) (16オ)